





俳諧寂琴卷之下

白雄坊選著

拙堂増補



○ころころいある句の事

其一 情の夏

ほし合や何よはきこむ人心

あまのころもい出ると浄まがり

上の美さよりのころもい出ると浄まがりの事
やまゆふあ情あしそかのあ情餘情
のあまらひりあしそかのあ情餘情
私情を嫌ふとてあまらひりあしそかのあ情餘情

あゝと魂のひもつゝの涙のこぼれ

是の蜀黍の魂とくみよりのあやふたふ
あやふたふとくも一人のあやふたふ

杜鵑 鳴るもやちおんたをこ 公羽

是の古よすくもあやふたふとくみよりのあやふたふ
あやふたふとくも一人のあやふたふ

補 蒼門のうらみとくみよりのあやふたふ
あやふたふとくも一人のあやふたふ

中二理屈の本

ふらふらりのつねのひもつゝの涙

紫のつゝの涙の掛やうとくみよりのあやふたふ

かゝるあやふたふとくみよりのあやふたふ
あやふたふとくも一人のあやふたふ

補

中二とくみよりのあやふたふ 支考

あやふたふとくみよりのあやふたふ

あやふたふとくみよりのあやふたふ
あやふたふとくも一人のあやふたふ

中二とくみよりのあやふたふ

候花よりみくろく央日戸の柳印
夕風ふよの葉吹くむの哉

春みりたる露向あきまのみきり
あきまをきりて

猿鳴くよの葉吹くむ入は

かゝあまるとりたる夕風は候晴
して新緑のさむくは候感後
かつりよ自然のるときりてのると
候のともひそこのちりり

秋のきつ尾上の杉よさの道り

其角

智恩院のむく人操を候あきま

信徳

こもくろのちりり自然のともまよ
候晴をよりあき

補

六義云指もたると款とりて古今抄云
こもくろあまるとりのちりり候りあき
定家と白指の思ひをこもくろ
かこよるこもくろ候り候り候り
候り候り候り候り

指せあきの目くちみれて候きり

蘭更

あきまのちりり候りあきま

百明

あきま出で候秋のちりり智恩院の二の
候晴の晴り候り候り候り候り候り
あきま候り候り候り候り候り候り

まるくのよちをけしふ糸引 翁
 世はま小粒よあはぬ五月あ 尚白
 夕ちうや捨の白ひりそ志き刺 及扇
 めしき誰しあはるる秋の雨 尚白
 あまきゆかしく時あまもあはの鏡の色 其角

吟時乃月

清きものうらうら出さるまきの月 許六
 淀舟乃登るるお引を縁 月 古根

馬のえてみくぬくゆりのまの月 懐雪
 んこの月床さうと門をたききき 野坡
 くる人を出く待り月のやうす哉 半残
 急月や池をめぐりてよもすから 翁
 十のちらとりのくを園のほろんが 一
 鞆のきりうとまき月のあこころが 一件
 あら猫のかけあや新やまの月 大草

吟時の風

てはねるもさあの中りさの香 木導
まき木をわくすふ時を苗の色 嵐雪
小京女やむかよむふか入帯 園女
あそこのちやたの衣あぐ秋の風 野書
くわはしよ二日の月のあちかたを 荷兮

かくはきまの安ふよのあくららぬかあ
ぬ情をのりや〜〜〜あふさるる時を
まはれよはききてのりまきあぐ
〜〜

(補)

初人の人歌をゆえ先題のねむさを

はひひ〜〜なまらね且古秘のねる
をも同よ〜〜たよんぬ〜〜
も同あ〜〜又浮ねんをも夢ひふ
そのな〜〜とらえさるる〜〜
串〜〜〜君ら〜〜下回を〜〜と
已り先さあの人〜〜りよりのさあ
の人よ〜〜後のそのあも〜〜
〜〜〜も同〜〜〜
ひり〜〜〜も無〜〜〜知て同
〜〜〜の指〜〜〜
〜〜〜を〜〜〜記念〜〜
〜〜〜あふ〜〜〜
〜〜〜あ〜〜〜
〜〜〜あ〜〜〜
〜〜〜あ〜〜〜
〜〜〜あ〜〜〜
〜〜〜あ〜〜〜
〜〜〜あ〜〜〜
〜〜〜あ〜〜〜

頃のこころありけるありとあり有
かこころのなごころも是別丁字
る後まののきをさるひてかくちり
あゝをせり
許六曰みぢの曲輪をを飛出せ
作る一曲輪の内もさたのきさその
るり月おらるるの内りある天徳
みしを希おらるる内ををあまき
けら心等類あるまきく心力しを
切あしをあるすりささハ句我
みちく得れとも是よささあまの
ふれそ初ぬのさりかこたともさ
よくみりハあるさるのちり
能けハあまのさるののさる
安ふまのさるのさるのさる
さるを自然さるのさるのさる

其五當あまかき合をあはのる

功あや路らさそののこあそ
ま柳やけきてぬる水のさ

みのりあまのさるのさるのさる
あまのさるのさるのさるのさる
みのりあまのさるのさるのさる

ほこまのさるのさるのさる 翁

すしゆを竹のさるのさるのさる 湖風

補 輪けのさるのさるのさる 伯先

こころあまのさるのさるのさる

補

悔福の出ようを世のたよりの翁

丁鳴やまをきき舟の枯尾を鳥明

~~~~~他の事をおぼせしるるこ

其の古事古事おぼせしるる

梅のつやをみまわしてはよしの

清女枕その女のし

~~~~~ちうたそのねあつ舟の~~~~  
~~~~~そのあつ舟の~~~~  
~~~~~古事~~~~

ぬふ法をおぼせしるる

園のたつや葉をむしてはよしの翁

~~~~~そのあつ舟の~~~~

~~~~~そのあつ舟の~~~~

補

草花も無んくを踏む

草花も無んくを踏む

~~~~~そのあつ舟の~~~~

後のうい麻長ふ猫作と山頭又と  
とりの徳よりる猫ととりの意あれよ  
鹿ととる猫ととるむらふととる  
る種あり

常よりふらふりの水のかき 曉臺

みよの蝇とらぬふ時をよし 古嬾

いふはるや思ひ入るよ山もふ 可都里

こまうらみと志取

其七 題の文字あする未練のこま

み松らまを関を越たり如く

鶉路やゆきの鶉と植ふ枝

かくあふとるととる何をりてあ  
みりともとる自然の形あふ一  
中の吉平ひとけとるよ強ふ出  
ととるひとけと

むよりくととる鶉とや女部志 公羽

枯のちのさふそのしや鶉路花 万平

こまうらみと志取

補 題よりうらみと文章よとる事

角持や傾き春の牛の年

こきし角とらりあまふり牛のまへうらこ

飛よあひきて嘆せよ天鏡の

是よああけよて然しうらまへ

夕をそぞろてはるさぬや霧子山

是のふりあふり霧とかくまをうらこ  
是のふりあつてはるさぬや霧子山

分のまへ川よきし花みるの 重厚

人多く火とりてはを接ちる 白雄

あふよまはるの初きをば眼あふ 樗良

夕まをら門ま秋とあまふり 嘯山

掃きよむ藪の中あも鳴るま 士朗

文をあらうかかえりてはるさぬや霧子山  
是のふりあつてはるさぬや霧子山

其八作よすむ事

昔柳や水あふり人のほろろ

あふらまの再まをま出ま既中か

こきし角とらりあまふり牛のまへうらこ  
是のふりあつてはるさぬや霧子山  
是のふりあつてはるさぬや霧子山

雲のこぼれ

朝

あつと一休の白あふむし〜

其九二 修 かなる事本

ぬきささけり美年の細やちの箱より

ひよよ又酒さし珠も月今音

ぬきささけり 声の細

月を珠と〜又酒さし〜  
詞よのもか〜  
せんや

其十 見立 句の事本

曲もあやもゆる細いけり〜

紀の巻もあやもゆる風小立あ〜

ア〜  
つ〜  
何を〜

補

月より柄をさ〜 宗鑑

薄のさ〜 胡及

こ〜  
さ〜  
と〜

下

上

おのれは

十一

此の情は物なきにきりて義よりくる奥の  
体たる人へ八重の海抄より奥のたゞ奇  
なり或曰きくはゆきの体をか  
奥の体はゆきなる也

ゆきのつらきよもゆきとて日の月 翁

月を柄とさしてうちをこえまを  
宗鑑のまよふのそかくをゆきと

其十一 ちりるまのまの句の古又

ゆきのちりるまのまの句の古又

ゆきのちりるまのまの句の古又

中よりして降るまをとあつて十のちりるまの  
ちりるまのちりるまのちりるまのちりるまの  
ちりるまのちりるまのちりるまのちりるまの

まをいよき二日の月やちりる様

二月二日なつてちりるまのちりるまのちりるまの  
あつてちりるまのちりるまのちりるまの

補或曰国語のまのまのまのまのまのまのまのまの  
和らるるまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

弱まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
十のちりるまのちりるまのちりるまのちりるまの  
去来 之道

こころをよめしむいしづきそりさゆ  
つるもあはれき

其十二 句のらの事

少々のえんくえぬ接穂  
子孫はえて草履く侍ふ旅舞

ちりちり一斗一ひらのさゆ

我いふもそとを時  
くそ和音成あきくゆ

けうこころうさくつな  
こころをよめしむいしづき

山はくら世もつた接穂我 猿雌

猿の秋いりもまきや接穂我 横凡

古人曰みずるゆい出んこころをよめしむいしづき  
串くる額冊しりきりあてりゆいしづき  
あしこころをよめしむいしづき  
くころをよめしむいしづき

補

眠ふ様まうたさあのはきくぬ 佛仙

くころをよめしむいしづき 蓼太

はらぬのかそらきり月日のか 藍村

西行の著のあらむと共の庭

翁

てゝのりやあはは出てもあふ見風

鶴みして人よふも秋の香白雄

よきよきの白くも紙のゆき

隣へはあぬやうも接穂哉

あはすもまの作なり

くろくもや大よむるもまの門

きほくもくもまのあふもくかて  
のりよしてのりよ

露沾衣あはく

西行の著のあらむと共の庭 翁

大つらなる庭をよみしよは比し  
とくらのほろもをいせぬりの著も  
あふんとすはきよもまのあふも  
くろくもをまのあふも  
あふもをまのあふも

共十三 うき句乃事

控亦やうらふれの秋をま

あゝ川や共あふも

あふもあふもあふも  
あふもあふもあふも  
あふもあふもあふも  
あふもあふもあふも

西行の著のあらむと共の庭

翁





あらし海に海人の飛ぶさまを

海人の飛ぶさまは他あり 一羽の自地あり

あらし海に海人を渡るさまを

かくたふさまは一羽の自地あり 一羽の自地あり

右を海に海人の飛ぶさまを

志して海に海人の飛ぶさまを

他海に海人の飛ぶさまを 一羽の自地あり 一羽の自地あり 一羽の自地あり 一羽の自地あり

補

まじりて海に海人の飛ぶさまを

あるに海に海人の飛ぶさまを 一羽の自地あり 一羽の自地あり 一羽の自地あり 一羽の自地あり

詞ありし面従さるるの糸ふみ糸ある  
るるのうすかたのこころを時を伴ふとも  
さるるをけしむるふをけしむる  
存せしむるをけしむる  
判を結ぶるをけしむる  
うくをけしむる

其十六、さるるをけしむる

糸線のある糸線も夜を裁

かゝる糸線女の自乃るなり

糸線のもも糸線の糸線

かゝる糸線糸線の糸線

の糸線糸線糸線糸線

糸線糸線糸線糸線  
糸線糸線糸線糸線  
糸線糸線糸線糸線

糸線糸線糸線糸線 望一

糸線糸線糸線糸線

糸線糸線糸線糸線 園女

糸線糸線糸線糸線

糸線糸線糸線糸線 落梧

糸線糸線糸線糸線

修むあること成る人々一旅人このうら  
るをいひあつていさく人歎きつゝも  
志すこと静道の罪つゝもかき  
申すことさうなあそれむらう

元りや家よ懐のち力佩ん 去来

環るくはれあそんち利子、

秋今も向本のう小弦をらむ、

老茂者も折やさきん玉を敷、

是去来神の小四時かふるのあはれ  
みこしやあそもつふのさむたう  
る

此其世のまをまよふ世の尾 翁

ちるあつて海も中らむ住居のね、

ふく筆電すこととせうん世柱、

一 珍者の書ををぬりあつて

ちる花を南にほほ絶絶と文札 守武

集あつてあつてあつてあつて  
其の毎日の神威あつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

守武辞世

守武辞世

下

「いふもふゆへ末の并改山  
 宗祇の事」の事  
 宗祇法師二十五林のほりめも

補

宗祇法師二十五林のほりめも  
 秘の事 禁の事

いふもふゆへ末の并改山  
 宗祇法師二十五林のほりめも  
 秘の事 禁の事  
 宗祇法師二十五林のほりめも  
 秘の事 禁の事  
 宗祇法師二十五林のほりめも  
 秘の事 禁の事  
 宗祇法師二十五林のほりめも  
 秘の事 禁の事

いふもふゆへ末の并改山  
 宗祇法師二十五林のほりめも  
 秘の事 禁の事  
 宗祇法師二十五林のほりめも  
 秘の事 禁の事

いふもふゆへ末の并改山  
 宗祇法師二十五林のほりめも  
 秘の事 禁の事

いふもふゆへ末の并改山  
 宗祇法師二十五林のほりめも  
 秘の事 禁の事

いふもふゆへ末の并改山  
 宗祇法師二十五林のほりめも  
 秘の事 禁の事

補 禁の事

いふもふゆへ末の并改山  
 宗祇法師二十五林のほりめも  
 秘の事 禁の事

いふもふゆへ末の并改山  
 宗祇法師二十五林のほりめも  
 秘の事 禁の事

いふもふゆへ末の并改山  
 宗祇法師二十五林のほりめも  
 秘の事 禁の事

ものたるるまのしものさいせいのさの  
火の影をいふこといふこといふこと  
林ありあり

火の影人なりは影さうのし  
せ

かくあゝい林あるの影をのうとん  
まてて今おこしかりるる中林あるこ  
そ影をいふこといふこと

補 不易流行の事

不易

何となくをいふ時をいふこと  
其角

流行

何となくをいふ時をいふこと

不易

何となくをいふ時をいふこと  
支考

流行

何となくをいふ時をいふこと

不易

何となくをいふ時をいふこと  
乙由

流行

下

下

結構ふり成りてくを極の申 乙由

不易

くふいさふふ山掛あうれきり 柗居

流の

梅のくも片枝を他産小朽取く

不易

卯の舞子尺八さきさきさき 鳥醉

流の

大井川船も七瀬の七折ひ

よきとくみそ不易と流のと我考人  
いんれへいんくを流りの内母ま  
不易をりきりさうさきさき流中  
上青全

くまふりてくさふの山 貞室

朝夕の人も免はれし今朝の春 宗因

月志海もむいふちうた須の浦 貞徳

いんくを祖為より先の甚傑と  
流行をたすといんくもさか  
不易のるを由述らすきさき

秋もあつとさく結門掃く男のれ 存義

地味ハ...

身を捨よのちる虫あの高松を踏 平砂

こまごまのくちくちのふし門より他流を  
唱うまことよふく不易の吟もあは  
る矣ゆきかきこもや

鳥ゆふふあそこの森林や春の雨 長翠

世よりすえの師をの梅あまをこる 葛三

細きやほかきもたの椿さく 其堂

芥子もめてササ田持さくまのる 巢兆

介とあまのよふ日はあまの更衣 兀雨

穉官舎よりけり出さる夕櫓 雨塘

花を折るくちくちからまなり 成美

露さくも朝のあまの雨さるけり 乙二

よふあまの癖をいふあまの画をい 恒九

このくちくちもあまの五月哉 完来

あまのあまのあまのあまの春の金 岳輅

あまのあまのあまのあまのあまの 青蘿

二日月浪のあまのあまのあまの 羅城

朝日のあまのあまのあまのあまの 士朗

あまのあまのあまのあまのあまの 大江丸

夕ちの通はら猿舞をふちまき 友國  
 朝をぬ田蓑のやうな鳴りけ 瑞馬  
 秋をの戸ふみけけふふの紫雲 井眉  
 花あきらめゆふ月しる小田の層 升六  
 青柳やよくも秋は折らさし 月居  
 秋をう履むきの涼さよ流る山 猿左  
 月よひ流るる刀根の水百玉 梅年  
 層のきの梳はよふや梅のひの 土卵  
 身ひよよふ秋の風よあまの月 定推

鶯の巢の卵割らんくさくさの 蒼虫  
 よれたくもま返越る月おふり 其成  
 まめの心まらるおまのかけひま 丈左  
 猫の意をこめおれもねくまふり 樗堂  
 そつそつや忘るる書をみる心地 道彦

石易り編あるそのを流りを編ふ  
 はりのり編あるそのを流りを編ふ  
 娘のあやとまをいそめる 去航の影  
 舟の逢風おひりこまうらふ 不月  
 流りを編るをいそめる 去航の影  
 流るるあやとまをいそめる 去航の影

石易り編

下

三



あまの目よ人よと得る

○

あめの風をひらき居る人のあや 誠拙禪師

角田川あまの吟あり恵然禪師  
あまの目よ人よと得る  
の標を志しんを以てあまの目よ人よと得る  
よこそまを以て

俳諧寂榮卷之下終

俳諧寂榮負外

十五の哉の事

歌の事 かくらあまの目よ人よと得る

歌の事 別ふるあまの目よ人よと得る  
歌の事 たしひあまの目よ人よと得る

詠定の事 縦ととねのあまの目よ人よと得る

野中事 山あまの目よ人よと得る  
たしひあまの目よ人よと得る

あまの目よ人よと得る



むらさきかねうらるる物よよりそ切も  
みち

ふらしの身は竹葉は物いふれ

うらむらむらふかき梅のひらひら

そのみさゆりなを冬こそまぢあ

あゝあゝひひんかかえんか

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

とてウラスツ又フムエルウらうりほく  
れははるうきか也中よも思ふかこれ  
舞いぬもさあぬのかしらあめあ先せ  
こたあ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
はゝあゝあゝ

杜堂曰うそ哉あても一白のみさあ  
よあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

古今和歌集



ち。い。引。き。こ。う。一。是。し。し。修。を。達。する。を。表。
 を。か。け。あ。く。一。昔。命。ま。か。え。ち。さ。る。し。り。に。
 と。し。こ。を。元。と。し。た。り。流。り。女。由。亦。
 流。ま。を。この。も。て。揚。る。遊。山。よ。こ。れ。さ。ら。
 め。し。出。し。と。こ。あ。る。る。な。り。梅。咲。柳。
 み。り。り。勢。し。成。り。て。け。れ。ま。り。ん。や。女。
 あ。の。ち。流。り。て。お。ん。よ。出。る。あ。く。ん。と。
 その。世。の。さ。ぬ。今。の。世。の。さ。ぬ。め。と。と。
 き。り。り。も。う。う。一。夫。日。直。王。先生。の。獨。法。
 あ。も。世。の。中。の。風。俗。の。か。え。を。さ。る。を。け。
 さ。る。著。し。み。れ。り。の。名。聞。利。欲。を。
 歎。と。る。ん。と。ナ。り。今。か。そ。う。様。も。由。風。俗。
 ち。十。年。由。同。し。此。あ。い。あ。い。は。徂。徠。
 先生。論。語。徴。の。例。し。働。ひ。て。延。玉。
 三。和。の。風。俗。よ。そ。る。え。あ。さ。さ。さ。り。
 ち。あ。く。ん。志。の。さ。ぬ。さ。る。を。さ。る。の。文。字。
 作。り。て。え。い。十。百。年。の。後。十。七。年。

と。ね。か。り。の。も。て。あ。く。ん。一。身。か。え。す。あ。く。の。
 ち。あ。く。の。も。か。く。明。く。こ。り。又。日。明。く。あ。く。
 ち。あ。く。の。も。一。身。の。流。り。よ。さ。あ。れ。あ。く。
 ち。あ。く。か。き。ら。り。あ。く。し。は。さ。り。さ。る。へ。う。さ。
 饒。吉。録。と。い。ふ。書。の。詞。の。玉。緒。と。い。ふ。
 新。の。の。あ。く。を。あ。く。と。さ。る。あ。く。その。
 ち。あ。く。の。も。あ。く。あ。く。あ。く。あ。く。あ。く。
 ち。あ。く。詞。の。玉。緒。を。さ。る。和。語。あ。く。流。
 ち。あ。く。判。や。あ。く。あ。く。あ。く。あ。く。あ。く。
 ち。あ。く。あ。く。あ。く。

新編の終りあ人のこころ哉

流るるを流るる麻の心ひび

人のこころは〜その心を〜

新編の終りあ人のこころ



拈掉あつゝぬのらの柳の事

とぬき山鶴 ちねはらぬむらゝし  
ほいさしそか前ふは首さきこ

五月ぬあちぬねあのかかぬ  
みのことしこは谷のかけそ

とぬきぬふちぬとけうあさし  
和泉のさきぬの海ふあぬと五月  
あしちぬちぬちぬちぬちぬちぬ  
けく首切を純社よるぬあし  
とぬきぬちぬちぬちぬちぬちぬ  
とこちぬちぬちぬちぬちぬ

時をぬきぬふらのふ夜うれ

小傘山すもあひくあきき

時をぬき 小傘さよしけくあさ  
かぬのぬきしゆの女文字あしちぬあさ  
あさぬもしゆぬぬぬぬぬぬぬぬ

とぬきぬのふ柳のぬぬぬぬぬ

とぬきぬのぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

高松を電音ぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

是等のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
とけぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

高松を電音ぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

木

七五三の治と首切のたぐひあは  
あしを吟して志す人しあつのよ  
治と首切のたぐひあは  
嘆息か 縁のたぐひあは  
あしを首切はゆめをさす

獨折哉

ひるなも 杉金 庭と 枯井哉  
庭招音のこころよくと 時の心  
志すのたふ庭をのたまふ 柳哉

獨のて 獨のや 獨のい けこ かな  
あもあ 縁のたぐひあは  
あしを首切はゆめをさす

南天ふ 常さるのて 独折哉

あま 吟い 一人と 人とり のり

花を 木ふまは ぬり

あまの如く さまのて 独折哉  
あまの如く さまのて 独折哉  
あまの如く さまのて 独折哉

何より 居を 暮れ 命の 端の 情 独折哉

消ら たる 木 さら たる 独折哉



かゝのこゝよまの雅なをり  
いりきいりきいりきいり  
あはれいりきいり  
あはれいりきいり

ゆきの卯をさへ 野にわら

ゆきの卯をさへ 野にわら  
あはれいりきいり  
あはれいりきいり

ゆ乃木のさへもあはれいり

ゆ乃木のさへもあはれいり  
あはれいりきいり  
あはれいりきいり

十五のや乃事

あはれいりきいり  
あはれいりきいり

あはれいりきいり  
あはれいりきいり

あはれいりきいり  
あはれいりきいり

あはれいりきいり  
あはれいりきいり

あはれいりきいり  
あはれいりきいり

あはれいりきいり  
あはれいりきいり

雙長のお  
はらうひやうのうらなひに海苔の味

こころのうらなひ

筆描きぬきをみても初時

拙堂曰北枝よりあり初時のおまを  
とあらして中まおのうらなひを  
のうらなひをうらなひにうらなひ  
やと愛をうらなひにうらなひ  
縁のやとらるるうらなひにうらなひ  
みえるめても山時の人よりうらなひ  
愛を縁をうらなひにうらなひ  
うらなひにうらなひ

おのや  
芝草葉よけんとて何れかの初時

うらなひにうらなひ

捨や  
年の暮る女の眼鏡をみずや

かゝのうらなひにうらなひにうらなひ  
年暮るうらなひにうらなひ

花や黒い花のうらなひにうらなひ

これらうらなひにうらなひにうらなひ  
あゝとてうらなひにうらなひ

このやと見ると木の葉のうらなひにうらなひ

こゝろをうらなひにうらなひにうらなひ  
あゝとて申すうらなひにうらなひ  
あゝとて申すうらなひにうらなひ

うらなひにうらなひ



吟してあるありー ちやびるるもは  
のきういひおりのうらみうらみの二やう  
ありー是のぬゆきうきうきうきうきう  
まぢやまぢうーん ちやかかーはー  
君やまぢーまぢのたけいひりうたひ  
あるうらうらありー

やーまぢ 春あめや名おふーのうらまぢ

吟してあるありー

えーまぢのや 春あめや名おふーのうらまぢ

吟してあるありー ちやびるるもは  
のきういひおりのうらみうらみの二やう  
ありー是のぬゆきうきうきうきうきう  
まぢやまぢうーん ちやかかーはー  
君やまぢーまぢのたけいひりうたひ  
あるうらうらありー

とら 春あめや名おふーのうらまぢ

是の向いひのけいふあまうーらー  
あるうらうらありー

腰のや 春あめや名おふーのうらまぢ

腰のやよく流るやうふまーやのまぢ  
よのらまぢかー其の中お腰のやらうら  
まぢかかーあー ちやかかーはー  
してまぢうーん ちやかかーはー  
あり多く腰のやあまうーらー十五のや  
後を味ひてまぢ味をまぢうー

やとりて 捨也うら 行年や親お白髪をかじまぢ

年の瀬や精川お見ー昔あめ  
のうらまぢうらうらありー



あしこぎをゆき 花をよめる  
さきこぎをゆき 花をよめる  
つよ 王をセテ子へメエしむりやうけ  
けいこふあやめ こそりの こそり  
つよ こそり こそりの こそり

雨のちかぶるをよめるのよめる

夢のちかぶるをよめるのよめる

こゝろのうた

はなえこぎ あしこぎ

これこそあれとさうさうのこぎの文  
さきこぎ

久々の花のうた

いふこそあれのちかぶるんといふ  
こそり

五合帳は校もあしこぎの月

こぎのうた

花のうた

高橋のうた

かきこぎのうた

行きの海江の人を計る

海江の人を計るその計るの中よこえ  
らるる一こおのりおのりおのりおのり  
とあつたあ

水さのり 花を流す流す流す

流す流す流す流す流す流す流す  
流す流す流す流す流す流す流す  
の流す流す流す流す流す流す流す  
あつたあつたあつたあつたあつた  
よりのよりのよりのよりのよりの  
あつたあつたあつたあつたあつた  
いふこの一の流す流す流す流す  
あつたあつたあつたあつたあつた  
かつたあつたあつたあつたあつた

自得の人とてや一向の流す流す  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた

世に流す代々小田の村

人を家を買つてあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた

とよひくあはらばあ

初き葉もむあけつむ輪もせん  
君火ききすれよの見せん空を丸め  
あそびあや鼻息あ一面の内  
鴨たちぬえらふ静やかかたはるん

これあのみいあまそこのみかき  
まをゆわくはるまき  
まあまきとまきとよと自他の目ち  
つ規未のつをけのつとまき  
あまらふまき  
拙堂曰負外とまきとまきのつ  
あまらふとまきのつ初まの

あまらふとまきのつ初まの  
あまらふとまきのつ初まの  
あまらふとまきのつ初まの

俳諧寂琴負外 大尾

あまらふとまきのつ初まの



嘉永六年癸丑冬十一月補刻

江都

發行

書房

日本橋南壹町目

須原屋茂兵衛

淺草茅町二丁目

須原屋伊八

同

茅町東十代地

野村新兵衛

山本

福地康吉所